

女峰のえき花房発生要因について

1. 試験のねらい

女峰の促成栽培では時として第1次えき花房の発生が弱く、しかも不授精果が発生することがある。そこで、これらの発生要因を明らかにするため、苗の大小・保温開始時期及び昼温管理（昭和61年）、夜温・湿度・草勢及び着果数（昭和62年）との関係を検討した。

2. 試験方法

(1) 昼温管理（開花期以降低温：20～22℃，高温：25～27℃），保温開始時期（10月5日，15日，25日）及び苗の大小をそれぞれ組み合わせ昭和61年に検討した。

昭和62年は夜温：高温6～7℃・低温1～2℃，夜間湿度：多・少，草勢：強・弱及び頂花房着果数：10果・放任の各処理を設けた。湿度の多少は夜間小トンネルの有無，また草勢の強弱は地温の高低（電熱線）で操作し，処理は頂花房果実肥大期から開始し，2月20日まで行った。

3. 試験結果及び考察

- (1) 生育は早期保温ほど優れたが，花房伸長に対する昼温の影響は頂花房，えき花房ともまったく認められなかった。
- (2) えき花房第1～3果の不授精による奇形果は高温では極めて発生が少なく，低温管理で多発し，とくに第1～2果に集中した。保温時期や苗の大・小の影響は少なく，発生程度も処理間差がみられなかった。
- (3) えき花房の発生数は低夜温，少湿，弱草勢及び頂花房着果制限でやや多く，花房長は着果数放任でやや短くなる傾向がみられた。
- (4) えき花房の開花始期は高夜温及び着果放任（えきBのみ）で早まったが，湿度や草勢の影響は少なかった。また，花房当たりの着花数，とくにえき花房では高夜温，多湿，着果数放任で減少した。
- (5) 収量は夜温の高低及び湿度の多少による差が大きかった。なお，えき花房の第1～第3果の奇形果発生率は低夜温で最も高く，処理間では夜温の影響が大きかった。

4. 成果の要約

えき花房の不授精果発生には昼・夜温が低いことが主要因であり，えき花房発生の強弱には保温時期，昼・夜温管理，湿度，草勢及び着果数はほとんど影響していないものと考えられた。

（担当者 長 修※）

※ 現 今市農業改良普及所

表-1 えき花房の第1～3果における奇形果発生状況(昭和61年度)

処 理			奇 形 果 発 生 率 %						奇形果発生	
温 度 管 理	保 温 開 始 月 日	苗 質	えき花房 A			えき花房 B			指 数	
			第1果	2 果	3 果	第1果	2 果	3 果	A	B
			低 温	10. 5	小 苗	25	35	15	60	30
大 苗	25	40			5	35	30	0	1.3	1.6
15	小 苗	15		25	15	35	20	0	1.0	1.0
	大 苗	25		15	5	35	10	0	1.4	1.0
25	小 苗	40		10	15	55	10	5	1.1	1.3
	大 苗	35		45	0	50	20	10	1.0	1.7
高 温	10. 5	小 苗	5	0	0	10	5	5	1.0	1.3
		大 苗	5	0	10	5	5	0	1.3	1.0
	15	小 苗	0	0	0	5	0	0	—	1.0
		大 苗	5	10	0	15	10	10	1.0	1.3
	25	小 苗	0	5	0	10	10	10	1.0	1.7
		大 苗	0	0	0	10	0	0	—	1.0

注 第1次えき花房のうち、早く発生した花房をA、遅く発生した花房をBとした。

表-2 えき花房の発生数・開花期及び奇形果発生率(昭和62年度)

処 理	えき花房 発生数	花房長 cm		開 花 始 期 月 日			奇形果発生率%		
		えき A	えき B	頂花房	えき A	えき B	えき A	えき B	
夜 温	高	1.4	23.0	185	11. 9	11.22	12. 2	6.3	9.5
	低	1.6	22.0	17.2	11	30	10	21.8	14.8
湿 度	多	1.3	25.5	15.4	9	23	3	0	11.1
	少	1.7	26.1	18.1	10	23	7	0	3.0
草 勢	強	1.4	25.3	19.7	8	12. 1	4	0	4.8
	弱	1.6	25.3	17.9	9	11.28	3	0	7.4
着果数	10果	1.5	25.2	17.8	11	28	13	0	4.2
	放任	1.3	23.1	14.9	9	30	2	2.1	6.7